

友人間での謝罪時に用いられる語用論的方策 ——日本語母語話者と中国語母語話者の比較——

ボイクマン 総子
宇佐美 洋

1. はじめに

謝罪は、「話し手のあやまちや相手への被害等への責任を認め、許しを乞い、それによって相手との人間関係における均衡を回復する行為」(熊谷 1993:4)である。謝罪はまた、損なわれた関係の修復という困難な目的をもつため、謝罪者側は言語的・非言語的方策を駆使し、相手に対して積極的な働きかけを行なっていくこととなる。一方、謝罪を受ける側も、失われた自分の利益を相手に補償させたりするため、種々の方策を用いて交渉を行なう。こうした語用論的方策の使われ方が、言語文化によってどのように違うかということは、語用論の重要課題の一つである(Wierzbicka 2003)。

これまでの謝罪の先行研究(Olshtain and Cohen 1983, Blum-Kulka and Olshtain 1984, Trosborg 1987, Tanaka 1992, Kumagai 1993, 池田 1993, 堀江 1993等)は、謝罪する側の発話に注目したものが主流で、謝罪を受ける側の発話も分析した研究はほとんど見られない¹⁾。しかし謝罪とは、謝罪する側と受ける側とが相互に交渉しつつ共同で作り上げていく行為であると考えられるため、謝罪を受ける側の発話も分析の対象とする必要があると考えた。

本稿は、日本語母語話者と中国語母語話者が、「友人に対して謝罪をする」という言語行動を行なう際、謝罪をする側、受ける側それぞれがどのような語用論的方策をとっているかを調べ、日中の違いを明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

日本語に関する謝罪研究の中には、日本語母語話者の言語行動と、他の言語を母語とする人々の言語行動とを対照したものが多い(中田 1989, Tanaka 1992, 彭 1992, 池田 1993, 堀江 1993, 生越 1993, 山本 1995, オユーンビレグ 2004等)。そしてこれらの研究では、談話完成法などの質問紙調査によって大量のデータを収集し、謝罪行動の現われ方を比較するという手

法がしばしば取られている。しかし、本調査においては、謝罪者と被謝罪者の「やりとり」を分析の対象としたいため、質問紙による調査は不向きである。そこで、本調査では、2人の話者がロールプレイによって実際に発話したデータを分析対象とした。

中国語における謝罪の語用論的研究には彭(2003)がある。彭(2003)は中国語の謝罪発話表現を、意味論的条件・語用論的条件によって「真性・明示型」「真性・暗示型」「擬似・明示型」「擬似・暗示型」に4分類し、それらはプロトタイプ性という観点によって順序づけられると論じている。また、謝罪のプロトタイプ性に対する認識は言語社会によって異なることを指摘し、謝罪発話表現における社会語用論的対照研究の必要性についても言及している。本稿は、彭(2003)のいう「謝罪発話表現における社会語用論的対照研究」を、実際のデータを使用した実証的手法により遂行したものとして位置づけられる。

3. データ

分析に用いたロールプレイ・データは日本語母語話者同士による日本語発話データ(以下JPm)と中国語母語話者同士の中国語発話データ(以下CNm)で、各40名20組である。日本語母語話者(以下JP)の年齢は20~41才で平均31才、中国語母語話者(以下CN)は22~33才で平均28才だった。男女の内訳は、JPは男女5組、男同士1組、女同士14組、CNは男女7組、男同士4組、女同士9組である²⁾。

ロールプレイの際には、以下のような筋書きを固定したロールカードを用いた。そして、CNmのデータを取る際にはこれを中国語に訳したカードを用いた。

【ロールカードA】：あなたは、同じクラスの友達に本を貸します。その本は高かったのですが、とても欲しかったので2週間アルバイトをしてやっと買った本でした。あなたはその本を日々大事にしていました。今日その友達に会うと、友達はあなたがしぶしぶ貸したその本をなくしてしまったと言います。あなたは怒ります。友達は何度も謝罪しますが、あなたはどうしても許せないと思います。しかし結局、友達が同じ本を買って返すことを約束し、仕方なく許すことにします。

【ロールカードB】：先週、友達の家に遊びに行ったとき、欲しいと思っていたがかなり高く買えなかった本がちょうどありました。あなたは友達に無理に頼んでその本を借りることができました。しかし、昨日電車でカバンをなくしてしまいました。しかもそのカバンには、借りた本も入っていたのです。あなたは友達に会い、本をなくしたことを話して謝りましたが、友達はなかなか許してはくれません。結局あなたは、その本を買って返すことにして許してもらいます。

今回このように筋書きが決まったロールカードを使用したのは、損害の説明、謝罪、埋め合わせ、許し等、会話の中に現れる交渉の段階を固定し、各段階においてどのような方策が

用いられるのか、JPm, CNm 間での比較を容易にするためである。

分析範囲は、「謝罪の切り出しから謝罪終了まで」とし、挨拶（出合いや別れ）など、謝罪と直接関係しない部分は分析の対象から外した。

4. 分析結果と考察

4. 1. 謝罪をする側の語用論の方策

以下、上記で分析範囲として設定したデータの中で、CN, JP がどのような語用論の方策を使っているかを分類し、その現れ方を分析していく。ここでいう「方策」とは、「会話内で意味的にまとまりをなしている一続きの発話単位が、会話の流れの中で果たす機能のこと」を指す。

謝罪する側の方策の分類（【表1】）は、先行研究（Olshtain and Cohen 1983, Trosborg 1987, Kumagai 1993, 池田 1993, オユーンピレグ 2004 等）を参考にしつつ³⁾、今回の発話データに対応できるよう新たに設定した。また、それぞれの方策を性質の似たもの同士でまとめ、11の「カテゴリ」を設定した。

【表1 謝罪する側の方策】

カテゴリ	方策
話題の前触れ ⁴⁾	a 話を始めることの前触れ 例：ちょっと話があるんだけど
	b 話の目的を暗示する前触れ 例：謝りたいことがあるんだけど
	c 話題についての前触れ 例：こないだ借りた本なんだけど
	d 謝罪慣用表現を用いた前触れ 例：申し訳ないんだけど
事情説明 ⁵⁾	e 自己弁護 例：わざとじゃないんだから／気をつけてたつもりだった
	f 損害発生時の客観的状況説明 例：昨日電車がとても混んでて
責任の承認 ⁶⁾	g 自分の責任を暗示的に承認 例：慌てて降りたので／うっかりしてて
	h 自分の責任を明示的に承認 例：私の不注意で／私が悪いから
謝罪	i 慣用表現で謝罪 例：ごめんなさい／申し訳ない
	j 慣用表現以外の表現で謝罪 例：許してもらえる？／勘弁して
申し訳なさ の表明	k 当惑・恐縮の気持ちを表明 例：どうしよう
	l 後悔の気持ちを表明 例：貸してもらっじゃなかった
	m 被害の大きさに言及 例：あんな高くてすごく大事にした本なのに
	n 修復の悲観的見込みを表明 例：出てこないよなやっぱり
なだめ	o 相手の気持ちを推測・怒りの静め 例：許せないでしょ／怒らないで
	p 楽観的見込みを表明 例：多分出てくると思うんだ

カテゴリ	方 策
人間関係への言及	q 相手からの恩恵に言及 例：無理ゆって借りたのに
	r 互いの親しさに言及 例：我們是交情這麼好的朋友（訳：私たちこんなに仲良しの友達でしょ）
埋め合わせ	s 損害修復のための試みを説明 例：駅に問い合わせしてみたんだけど
	t 埋め合わせ伺い 例：どうしたらいいの
	u 謝罪・弁償では不十分との表明 例：同じ本にはならないけど
	v 弁償の申し出・弁償の約束 例：必ず、あの、買って返すんで
	w 弁償に関わる質問・お願い 例：もうちょっと待ってください
感謝	x 相手の謝罪受け入れに感謝・安堵 例：ありがとう／よかった
約束	y 今後気をつけると約束 例：もうこんなことないよう気をつけるから
その他 ⁷⁾	相づち、相手の質問への応答等 例：そうだね／本当
	その他・不明 例：もし出てきたらそんなときはそんなときだよ

さらに、実際のデータにおける「謝罪する側の発話」を、機能的にまとまりを持つ発話単位ごとに切り出し、それらを【表1】の方策のいずれかに分類して各方策の出現総数を数えた。

単位の切り出し方は、次の [1] [2] [3] のルールによる。[1] 一連の発話の間に、文境界や相手の発話（相づち等）があったとしても、一つの機能を持った発話が続く限り一つの単位として数えた。[2] 同一の意味の発話が2回以上繰り返して話されていても、同じ機能を持つと考えられる限り一つの単位として数えた（例：「ごめんごめん」は全体で一つの単位）。[3] 「あの／えっと／ま」等のフィラーは、先行研究ではためらい等の方策を持つ単位として取り上げられることもあるが、ためらいか単なる場つなぎかの判断は難しいため、本研究では一つの単位としては立てない。

各方策のJPm, CNmにおける使用状況の結果は、次に示す【表2】の通りである。各方策の総数と、全20組のうち当該の方策を使用したペアの割合を%で示した。また、太字の数字の箇所は、本稿で特に着目した部分である。

【表2 謝罪する側の方策とその使用状況】

カテゴリ	謝罪する側の方策	JPm		CNm	
		総数	使用率	総数	使用率
話題の前触れ	a 話を始めることの前触れ	1	5%	7	35%
	b 話の目的を暗示する前触れ	14	65%	4	20%
	c 話題についての前触れ	13	65%	11	50%
	d 謝罪慣用表現を用いた前触れ	15	60%	14	60%
事情説明	e 自己弁護	2	10%	29	70%
	f 損害発生時の客観的状況説明	32	100%	39	100%
責任の承認	g 自分の責任を暗示的に承認	13	55%	7	35%
	h 自分の責任を明示的に承認	12	50%	8	25%
謝罪	i 慣用表現で謝罪	104	100%	54	100%
	j 慣用表現以外の表現で謝罪	12	45%	5	20%
申し訳なさの表明	k 当惑・恐縮の気持ちを表明	7	30%	2	10%
	l 後悔の気持ちを表明	1	5%	0	0%
	m 被害の大きさに言及	28	80%	9	40%
	n 修復の悲観的見込みを表明	6	30%	1	5%
なだめ	o 気持ちを推測・怒りの静め	2	10%	5	10%
	p 楽観的見込みを表明	7	20%	0	0%
人間関係への言及	q 相手からの恩恵に言及	8	30%	1	5%
	r 互いの親しさに言及	0	0%	3	15%
埋め合わせ	s 損害修復の試みを説明	29	95%	10	30%
	t 埋め合わせ伺い	4	20%	11	40%
	u 謝罪・弁償では不十分	9	30%	0	0%
	v 弁償の申し出・弁償の約束	52	100%	52	100%
	w 弁償に関わる質問・お願い	7	20%	13	25%
感謝	x 謝罪受け入れに感謝・安堵	18	55%	10	40%
約束	y 今後気をつけると約束	1	5%	2	10%

謝罪者側が使用した方策の組み合わせは、JPmでは1組あたり平均10.8種類、CNmでは平均8.3種類で、JPの方が種々の方策を用いて謝罪を行っていた。また「f 損害発生時の客観的状況説明」と「v 弁償の申し出・弁償の約束」の使用率は100%であるが、これはロールカードの指示によるものであるため以下では特に言及しない。

以下、JPm, CNmにおける謝罪者側の方策の使用状況をカテゴリごとに見ていく。

《話題の前触れ》：「a 話を始めることの前触れ」(JPm5%, CNm35%)はCNmにおいて、「b 話の目的を暗示する前触れ」(JPm65%, CNm20%)はJPmにおいて使用率が高い。JPもCNも方策bや方策d(謝罪慣用表現を用いた前触れ)を用いて会話の初期の段階から相手に謝る姿勢を見せるが、JPは、例(1)のように様々な前触れの方策を駆使する傾向があるのに対し、CNは例(2)のように方策dを用いて単刀直入に謝罪内容を述べる例が多かった。JPは、各種の前触れの方策を用い、言いにくそうに話題を持ち出す姿勢を見せることで申し訳なさを表明していると思われる。

- (1) 1B あのさちょっと//朝から申し訳ない話してもいいかな。 ← b
 2A んー。 んーん。
 3A どうしたの?
 4B あのねこの前ほら借りたじゃん//参考書。 ← c
 5A んーんー貸した貸した。
 6B 高い高いふふあれなんですけど。 ← cの続き
 7A おーうー。
 8B ごめん、あのね。 ← d (jp07-08)⁸⁾
- (2) 1B 哎呀真对不起欸 (0.3) ← d
 昨天我坐車的时候把包给丢了 ← f (cn14-19)
 (訳：あー本当にごめんなさい。昨日電車に乗ってた時鞆なくしちゃったの)

《事情説明》：CNは、「e 自己弁護」という方策を用いることが多い(JPm10%, CNm70%)。JPmにおいて「自己弁護」と解釈できる発話は、「私も気をつけていたつもりだったのに (jp11-12)」、「それは知ってて大事にしてたんだけど (jp31-32)」という2例のみであり、自己弁護ではありながら自分の責任を回避しようとする含意は認めにくい。これに対しCNmでは、「那是沒辦法 (訳：どうしようもなかった) (cn18-21)」、「我也不是故意的嘛 (訳：私もわざとじゃなかったのよ) (cn33-44)」等、明確に責任を回避しようとする発話が見られた。

「自己弁護」は、自分の行動を直接的に非難されることによって損なわれた自己のface (Brown and Levinson 1987)を立て直す方策だと考えられる。彭 (1992:78)は、中国人は自分が間違っていると認識している状態であっても、「自分への配慮と思われるメンツ防衛の行動」を取ることを指摘している。

謝罪時に「自己弁護」を行なう理由について、CN1名(女性25歳)にインタビューしたところ、「相手から厳しく非難や責任追及をされるとつい自己弁護してしまう。中国語母語話者であっても、親しい友人同士でなければ厳しい非難は出にくく、厳しい非難のない場合は

自己弁護も出てこないのではないか」というコメントが得られた。このことは、謝罪者側が使用する方策と、被謝罪側が使用する方策とが密接に関連しあっていることをうかがわせる。次の例(3)では、1A および 3A で豊み掛けるような責任追及が続いたために、4B で「つい自己弁護が出てしまった」ものと考えられる。

- (3) 1A 啊 你弄丢了 你說不能丟你還弄丟了 你說話不算數 (訳: えー、あなたなくしたの? なくさないって言ったのになくしたのね。約束を守らないのね)
2B 哎呀我又不是 (訳: やー、私も・・・)
3A 你說怎麼辦吧 (訳: あなたどうするって言うの)
4B 哎呀我又不是故意的 (訳: やー私もわざとじゃないのよ) <cn22-23>

《責任の承認》: 「h 自己の責任を明示的に承認」(例(4)～(6)の網掛け部分)の方策は、弁償の申し出をする際(例(4))に見られる場合や、損害についての説明を行なう際(例(5))等に見られる場合があった。方策 h の使用率は、JPm で高く CNm で低かった (JPm50%, CNm25%)。また、JP は、「g 自分の責任を暗示的に承認する」という方策(例(6) 1B 「ほんとに忘れちゃったんだよね、うっかり」)も、CN より相対的に多く使用している (JPm55%, CNm35%)。

このように、JP では謝罪者側が「責任の承認」を行なうことが多いのに対し、CN の謝罪者が自らの責任を認めることは少ない。このことについて前出の中国語母語話者からは、「弁償を申し出るのであれば、それで責任を認めることになるので、わざわざ明示的に責任を承認する必要は感じない」という説明が得られた。

- (4) 1B 是我弄丟的 我應該是應該賠的
(訳: 私がなくしたんだから、私が弁償しないとね) <cn28-29>
(5) 1B 真的很抱歉 我一不小心 就把這書包給落在電車裡面了 (訳: 本当にごめん。ちょっと不注意で、鞆を電車の中に落としてしまったんだ) <cn42-43>
(6) 1B ごめんね。でもさ、ほんとに不注意だったんだけどさ (0.4) ほんとに忘れちゃったんだよね、うっかり。 <jp13-14>

《謝罪》: 「i 慣用表現で謝罪」は JPm, CNm 共に使用率 100% であるが、使用回数は JPm が 104、CNm が 54 と、大きな差が開いた。このことは、「JP は謝罪を繰り返す傾向がある」という先行研究の知見 (Kumagai 1993; 池田 1993; オユーンビレグ 2004) をさらに補強するものである。実際 JPm では、非難や否定的な反応を受けた後や損害内容を述べた後以外にも、弁償を申し出るとき(例(7))、相手から許しを得た後(例(8))、損害修復の

試みが失敗に終わったことを述べるとき、被害の大きさに言及するとき等、幾度も繰り返して謝罪慣用表現を用いていたが、CNmにはこのような謝罪慣用表現の頻繁な繰り返しは見られなかった。

(7) 1B 買ってうん、返すよ (2.2) それんー、うん、ごめん本当に。

2A んー。

3B えー許してもらえませんかごめんね、本当に。 <jp01-02>

(8) 1A んーいいよじゃあ返してね。

2B ん (1.2) ありがとうごめんね。 <jp09-10>

彭 (2003:13) は、「同じ事態に対して日本語社会では謝罪の明示的表現が多く使われるのに対して、中国語社会では明示的表現が多く使われる現象が観察される」と述べているが、今回のデータではこうした傾向は確認されなかった。これは今回のデータが、「相手の大事な本を紛失する」という過失の度合いが高い状況設定だったため、中国語においても明示的表現を用いて謝罪せざるを得なかったということかもしれない。

《申し訳なさの表明》：JPはこのカテゴリの中でも、「事態のマイナス局面について言及する」という方策を、CNに比べ多用している。例えば、「m 被害の大きさに言及」(JPm80%, CNm40%)、「n 修復の悲観的見込みを表明」(JPm30%, CNm5%) 等である。マイナス局面に言及するのは、「そのような事態を招いた自らの責任を再確認する」ということになり、それを相手に示すことが誠実さにつながるからだろう。

例 (9) は、マイナス局面についての言及が《申し訳なさの表明》となっている例である。A (謝罪を受ける側) は1Aで「失われたものがいかに貴重なものだったか」を述べ、相手を間接的に非難しているが、B (謝罪する側) はそれに反論せず、むしろ同調することで、そのような事態を招いたことへの自責の念を表明している。

(9) 1A あんなん拾った人なんか絶対持って行くなって、あの本高いって言ったやんか。

2B そうだよね、そうだよね。自分でもほしかったからもうね拾った人はもうそうね。拾った人はそうだよね、持ってっちゃうね。 <jp31-32>

《なだめ》：「p 楽観的見込みを表明」することによって相手の気持ちをなだめるという方策はJPm (20%) にのみ見られた。また、「o 気持ちを推測・怒りの静め」の使用率はJPm, CNm共に10%だが、詳細に見るとJPとCNで違いが見られた。JPは「もうぎりぎりいつまでもその結果待ちでリョウコちゃんに話すのが遅れるよりはやっぱりすぐ話したほうがいいかなと思ってきたんだけど <jp33-34>」のように、「気持ちを推測」する表現を多用

するのに対し、CNでは「妳不要生氣啦（訳：怒らないで）〈cn48-49〉」のように、直接「相手の怒りを静める」表現を使用している。CNは相手の気持ちに直接訴える方策を、JPは遠まわしになだめる方策を用いるようである。

《人間関係への言及》：「q 相手からの恩恵に言及」する方策はJPmに多く見られた（例：「やっとお願いして貸してもらったのに〈jp09-10〉」）。これは相手に対する《申し訳なさを表明》ともつながる方策である。他方、「我們是交情這麼好的朋友（訳：私たちこんなに仲良しの友達でしょ）〈cn01-02〉」のように「r 互いの親しさに言及」することによって許しを得る方策はCNm（15%）にのみ見られた。オユーンピレグ（2004）でも、この方策はモンゴル人においては友人間で見られたが、日本人においては、友人に対する時にも教師に対する時にも見られなかったことが指摘されている。

《埋め合わせ》：「s 損害修復の試みを説明」（JPm95%、CNm30%）はJPmに多く⁹¹、「u 謝罪・弁償では不十分」との表明はJPm（30%）にのみ見られた。uは「同じ物って言っても、ま、違うんだけど〈jp01-02〉」のように、謝罪や弁償をしても不十分であることを伝えるものであり、《申し訳なさを表明》ともつながる意識である。

4. 2. 謝罪を受ける側の語用論的方策

先行研究では、謝罪を受ける側の言語的方策について記述されたものは見当たらない。そこで、【表1】で設定した「謝罪する側の方策」にならい、「謝罪を受ける側の方策」と「カテゴリ」を新しく設定した。カテゴリの設定に当たっては、謝罪する側のカテゴリと可能な限り対応が取れるよう配慮した（例：[謝罪側] 話題の前触れ→[被謝罪側] 前触れに対する反応、[謝罪側] 事情説明→[被謝罪側] 事態の確認、など）。これにより、以下の【表3】を得た。

カテゴリ	【表3 謝罪を受ける側の方策】	
	方 策	
前触れに対する反応	ア	相手の様子伺い 例：どうしたの
	イ	不安を表明 例：なんか怖いんだけど
	ウ	相手の持ち出した話題を発展 例：大丈夫？
事態の確認	エ	事態の確認・事態に対するさらなる情報求め 例：どういうこと？
	オ	相手の取った対策を質問 例：電車の会社に問い合わせとかは？
謝罪拒否	カ	謝罪を拒否 例：嫌です
直接非難	キ	相手の行動に対する直接非難 例：ひどいやんかなんでなくすの？
間接非難	ク	驚き・心外の念・困惑・混乱を表明 例：えっ本当？/信じらんない
	ケ	不快・不満・不賛同を表明 例：すごい困る/腹は立つな

カテゴリ	コ 後悔を表明 例：だからあの本貸すの嫌だったのに
	方 策
間接非難	サ 被害・損失の大きさに言及 例：二週間バイトしてやっと買ったんだよ
	シ 悲観的見込みを表明 例：誰かさ持ってちゃって返してくれないんじゃないかと思うんだけどさ
譲歩	ス 相手の過失・損害状況に対する一定の理解 例：そっかいろいろあったもんね昨日、わからないわけじゃないけど
人間関係への言及	セ 信頼への裏切り・関係の非継続を表明 例：でも佐藤さんのためだからと思って貸したのに／もう絶対貸さないからね
	ソ 互いの親しさに言及 例：看在我們是從小到大的朋友（訳：私たち小さい時からの友達だもんね）
弁償要求	タ 直接的に弁償を要求 例：弁償してもらうしか私の気持ちは晴れない
	チ 間接的に弁償を要求 例：ごめんなさいじゃちょっと困るんだよね
弁償申し出・ 謝罪に対する反応	ツ 弁償・謝罪の受け入れ 例：仕方ないねいいよわかった
	テ 弁償が困難なことを言及 例：あの本売り切れちゃってると思うし
	ト 弁償に関する同意内容の確認 例：本当にもう絶対約束だよ
	ナ 弁償申し出・謝罪に対する気遣い 例：急がなくてもいいんだけどさ
感謝	ニ 弁償・謝罪に感謝 例：ありがとう
約束	ヌ 今後気をつけるよう約束 例：もうほんと今度から気をつけてね
その他 ⁷⁾	ネ 相づち、相手の質問に対する応答 例：そうだよ ノ その他・不明 例：出てこないかな／メールします

謝罪を受ける側について、JPm, CNmにおける各方策の使用状況を示したのが【表4】である。総数・使用率・数字の太字の意味は【表2】と同じである。使用率が顕著に高いのは「サ 被害・損失の大きさに言及」、及び「ツ 弁償・謝罪の受け入れ」であるが、これはロールカードの指示によるものなので以下では特に言及しない。

【表4 謝罪を受ける側の方策とその使用状況】

カテゴリ	謝罪を受ける側の方策	JPm		CNm	
		総数	使用率	総数	使用率
前触れに対する反応	ア 相手の様子伺い	12	55%	13	45%
	イ 不安を表明	6	20%	0	0%
	ウ 相手の持ち出した話題を発展	10	30%	8	20%
事態の確認	エ 事態の確認・さらなる情報求め	18	55%	16	65%
	オ 相手の取った対策を質問	8	40%	4	20%
謝罪拒否	カ 謝罪を拒否	5	20%	3	10%
直接非難	キ 相手の行動に対する直接非難	9	25%	23	70%
間接非難	ク 驚き・心外の念・困惑・混乱	33	75%	9	45%
	ケ 不快・不満・不賛同を表明	22	55%	7	20%
	コ 後悔を表明	3	15%	3	15%
	サ 被害・損失の大きさに言及	54	100%	31	100%
	シ 悲観的見込みを表明	11	30%	0	0%
譲歩	ス 過失・損害状況に一定理解	13	50%	0	0%
人間関係への言及	セ 信頼の裏切り・関係非継続表明	3	10%	12	45%
	ソ 互いの親しさに言及	0	0%	3	10%
弁償要求	タ 直接的に弁償を要求	10	30%	21	45%
	チ 間接的に弁償を要求	9	25%	0	0%
弁償申し出・謝罪に対する反応	ツ 弁償・謝罪の受け入れ	55	100%	39	95%
	テ 弁償が困難なことを言及	5	25%	9	40%
	ト 弁償に関する同意内容の確認	7	30%	18	55%
	ナ 弁償申し出・謝罪への気遣い	7	20%	4	15%
感謝	ニ 弁償・謝罪に感謝	2	10%	0	0%
約束	ヌ 今後気をつけるよう約束	3	15%	4	20%

以下、謝罪を受ける側の方策の使用状況の相違点をカテゴリごとに述べていく。

《直接非難》と《間接非難》：CNmでは《直接非難》が、JPmでは《間接非難》が多用されていることが見て取れる。「キ 相手の行動に対する直接非難」の出現率は、JPmで25%だが、CNmでは70%に達する。CNは、具体的には例えば「你怎麼那麼不小心啊(訳：なんでそんなに不注意なの) (cn17-20)」のように、相手の失策を直接指摘し責める表現をとっている。一方、JPmでは、《間接非難》の「ク 驚き・心外の念・困惑・混乱」、 「ケ 不快・不満・不賛同を表明」、 「シ 悲観的見込みを表明」の各方策において、CNmよ

り顕著に高い使用率を示している。JPは、「困る」「ショック」等、自分が受けた不快や不満等の心的影響を強調することで間接的に相手責めることが相対的に多く、謝罪する側のfaceにも配慮していることがうかがえる。

《譲歩》：「ス 相手の過失・損害状況に対する一定の理解」はJPmにのみ観察された(50%)。これも相手のfaceへの尊重を示すための方策と考えられよう。

《人間関係への言及》：「セ 信頼への裏切り」の例は、「你是我的朋友的面子上才借给你(訳：あなた、私の友達だから貸してあげたんだからね)〈cn17-20〉」、同じく「セ 関係の非継続を表明」は「這樣的話 以後都不能借你東西了(訳：こんなことなら、もうきみに物は貸せないよ)〈cn45-46〉」である。これらの方策は、CNmの方に多用されていた(JPm10%, CNm45%)。また、相手を許す際に現れる「看在我們是從小到大的朋友(訳：私たち、小さいときからの友達もんね。〈cn01-02〉)」といった、「ソ 互いの親しさに言及」に当たる発話も、4.1節《人間関係への言及》で述べたと同様、CNm(10%)にのみ見られた方策である。CNでは、損なわれた関係を修復するに当たっては、「友人同士の親しさ」という要素が、JPにおけるよりはるかに重要な働きをなしているようである。この理由について考察することは別稿での課題としたい。

《弁償要求》：「チ 間接的に弁償を要求」はJPm(25%)にのみ見られ、一方、「タ 直接的に弁償を要求」(JPm30%, CNm45%)はCNmの使用率が高かった。要求を行なう際、JPはCNに比べ、より間接的な言い方をしているといえる。

5. まとめ

本稿では、友人に対する謝罪場面における、日本語母語話者の日本語・中国語母語話者の中国語のロールプレイ・データを基に、謝罪をする側の方策と謝罪を受ける側の方策について分析を試みた。分析の結果、CN, JPが友人間で謝罪という言語行動を行なう際、話の進め方には以下のような傾向が見られた。

CN：謝罪を受ける側は、相手のfaceをそれほど考慮することなく、直接的な非難を行ない、相手の責任を追及する。追求を受けたと感じる(あるいはこれから受けるだろうと予想する)謝罪者側は、その非難を自己弁護などによってかわしながら問題解決交渉を進める。

JP：謝罪を受ける側は、相手のfaceを尊重しつつ間接的な方法で非難を行なう。それを受けて謝罪する側は自分で自分の責任を認め、その上で問題解決交渉を行なう。

ここから指摘できるのは、謝罪する側が取る方策と、謝罪を受ける側の方策とは互いに密接な関係を持っている、ということである。例えば、CNの謝罪する側に「自己弁護」とい

う方策が多いのは、謝罪される側が「直接非難」という方策を取っているからこそ導き出されていると解釈することができる。

また、謝罪という言語行動においては「責任の所在を明らかにする」という手順が不可欠であるが、この手順を誰が行なうのかについて、JP, CN 間には違いがあるようである。JP においては、この手順を謝罪する側が行なうよう期待されているのに対し、CN ではこの手順を、謝罪を受ける側が直接非難によって行なってしまうことが少なくないため、謝罪する側は自分の責任については特に言及しないこともある。相手に強く非難された上、さらに自らの責任について述べることは、謝罪する側の face が損なわれすぎてしまうからであろう。

同じ謝罪という言語行動に関し、JP と CN の間にこうした感覚の違いが存在することは広く認識される必要がある。特に、「誰が責任の所在を明らかにするよう期待されているか」「謝罪側に自己弁護がどの程度現れやすいか」についての感覚の違いは、JP と CN とのコミュニケーションにおいてトラブルの基となる可能性が高い。CN 学習者が日本語で謝罪の言語行動を行なう時、どのような「語用論的転移」が起こり、それによってどのようなトラブルが生じ得るか、トラブルを防ぐためには教育上どのような配慮が必要になるかについて、考察を進めていくことを今後の課題としたい。

注

- 1) Kumagai (1993) では、日本人はアメリカ人に比べ、謝罪が受け入れられた後も、再度、謝罪や事情説明を述べる等の関係修復を目的とした方策を用いる傾向があると指摘している。このように謝罪者と被謝罪者の相互交渉について言及している論文はあるが、被謝罪者の発話そのものを分析したものは筆者らの知る限りまだない。
- 2) JP は 40 名のうち 33 名が関東出身である。7 名は関東出身ではないが、録音時には関東に 2 年以上住んでいた。CN は、34 名が大陸出身、6 名が台湾出身である。
- 3) 【表 1】において、分類の参考にした先行研究でほぼ共通して挙げられている方策は「事情説明、責任の承認、謝罪慣用表現、なだめ、埋め合わせ、約束」である（ただし用語は同一ではない）。本研究では、実際の発話データにも基づいて方策の分類を行なったため、〈話題の前触れ〉がさらに詳細に分類されている他、謝罪後に現れる「x 謝罪受け入れに感謝・安堵」の方策も新たに設定されている。
- 4) 〈話題の前触れ〉カテゴリに属する各方略の意味は以下の通りである。
 - a: 単にこれから話を始めるということを示すだけの前触れ
 - b: 「言にくいことがあるんだけど」等、話の目的（謝罪）をほのめかす前触れ
 - c: 「本を借りたこと」「借りた本」という「話題」に言及する前触れ
 - d: 謝罪慣用表現を用いる前触れ

なおここでいう「謝罪慣用表現」とは、「申し訳ない/すまない/ごめん/悪い」等の「謝罪専用語彙」と、その異形態を含む慣用表現のことである。また同じ「謝罪慣用表現」であっても、損害内容に言及する前に現われるものは〈前触れ〉の d に、損害内容言及後に現われ実質的な謝罪の意味をもつものは〈謝罪〉の i に分類した。
- 5) 〈事情説明〉が、何らかの形で自己弁護に結びついていると判断されれば e、結びついていなければ

fとした。

- 6) 「不注意」「私が悪い」など、明示的に自分の責任を認める発言があった場合はh、「うっかり」「忘れた」など、自分の過失について言及しているが、明示的責任認定がなされていない場合はgとした。
- 7) 《その他》は分析の対象とはしない。
- 8) jp07-08は日本人データ提供者7番と8番の間の会話であることを示している。また、会話中の登場人物名はすべて仮名。発話者A,BはロールカードA,Bに対応している。文字化の表記は次の通り。
 //：重複発話の開始箇所／（数字）：沈黙の秒数／、：0.2秒未満の沈黙／?：上昇調／。：下降調／
 -：延長された音節／（波線）：笑いながらの発話／相づちは実質的な発話と区別し、直前の相手の発話の右下に表示。
- 9) 「s 損害修復の試みを説明」がCNmに少ないが、中国では遺失物係に届けて鞆が出てくる可能性は少ないため、そのような損害修復はしないのが普通のようなものである。

参考文献

- Blum-Kulka, S. and E. Olshtain. 1984. "Requests and Apologies: A Cross-Cultural Study of Speech Act Realization Patterns(CCSARP)." *Applied Linguistics* 5-3, 196-213.
- Brown, P. and S. C. Levinson 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 彭国躍. 1992. 「謝罪」行為の遂行とその社会的相関性について—中日社会語用論的比較研究—『大阪大学日本学報』11, 63-81.
- 彭国躍. 2003. 「中国語の謝罪発話行為の研究—「道歉」のプロトタイプ—」『語用論研究』5, 1-16.
- 堀江・インカピロム・プリアー. 1993. 「謝罪の対照研究—日タイ対照研究—」『日本語学』12-12, 22-28.
- 池田理恵子. 1993. 「謝罪の対照研究—日米対照研究—faceという視点からの一考察—」『日本語学』12-12, 13-21.
- Kumagai, T. 1993. "Remedial Interactions as Face-Management: The Case of Japanese and Americans." In S. Yumoto, M. Sakurai and A. Baba eds. *In Honor of Tokuichiro Matsuda*. 278-300. Tokyo: Kenkyusha.
- 熊谷智子. 1993. 「研究対象としての謝罪—いくつかの切り口について—」『日本語学』12-12, 4-12.
- 中田智子. 1989. 「発話行為としての陳謝と感謝」『日本語教育』68, 191-203.
- 生越まり子. 1993. 「謝罪の対照研究—日朝対照研究—」『日本語学』12-12, 29-38.
- Olshtain, E. and A. Cohen 1983. "Apology: A Speech-act Set." In W. Wolfson and E. Judd eds. *Sociolinguistics and Language Acquisition*, 18-35. Rowly, MA: Newbury House.
- オユーンビレグ・ゴンボ. 2004. 「モンゴル人と日本人の謝罪行動」『日本語教育指導者養成プログラム論集』3, 75-99. 政策研究大学院大学・国際交流基金日本語国際センター・国立国語研究所
- Tanaka, N. 1992. "In Investigation of Apology: Japanese in Comparison with Australian." 『明治大学外国語学部論集』4, 35-64.
- Trosborg, A. 1987. "Apology Strategies in Natives/Non-natives." *Journal of Pragmatics* 11, 147-167.
- Wierzbicka, A. 2003. *Cross-Cultural Pragmatics: The Semantics of Human Interaction*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 山本さゆみ. 1995. 「謝罪ストラテジーの日・タイ対照研究—ディスコース完成テストを通して—」『日本語教育論集』4, 88-108. 姫路獨協大学大学院言語教育研究科日本語教育領域